③ 調理の石器

1. 石皿

平らな河原石などの中央を皿状にくぼめた大型の石器で、調理台のような働きをしました。磨石や敲石とセットでドングリ、クルミ、トチなどの実を細かくしたり、山芋などをすりつぶしたりしました。また、ベンガラ（顔料＝朱色の原料となる鉱物）などを粉にするのにも使われたようです。石皿は草創期からありますが、市内では早期後半の遺跡から出土しています。

石皿・磨石：大野田遺跡

2. 磨石

磨石は石皿などの上で、ドングリなどの実をすりつぶすために使われました。片手でつかみやすい河原石を素材としています。石の表面は、石皿と磨かれて滑らかになっています。

3. 凹石

凹石は、石の中央に１～２個のくぼんだ跡が残っているやや平らな石です。クルミなどの堅い実を割るときに、くぼみの所に実を置いて、別の石で打ち割ったと考えられています。

4 縄文時代のくらし

縄文人は竪穴住居と呼ばれる地面に穴を掘り、地下に床のある住居に住んでいました。屋根と壁がいっしょになって傘のように穴をおおっていたので「縄文人の住まいは竪穴式で、外からは屋根だけのように見える。」というのが、これまでの常識でした。しかし、各地の発掘調査が進むにつれて、そのような住まいだけではなかったことが分かってきました。なかには、床に石をしいた住居や、集会場ではないかと考えられる大きな竪穴住居や、高床式の建物をつくっているムラもあります。

竪穴住居跡：下ノ内遺跡

太白区にある山田上ノ台遺跡は縄文時代中ごろの大規模なムラ（集落）の跡です。縄文人はなぜこの場所にムラを作ったのでしょう？それは、

- **南向きで日当たりがよいため。**
- **周りの見通しがよい安全な土地だったため。**
- **広く、比較的平らな土地だったため。**
- **付近の森や川に食べ物がたくさんあったため。**

と考えられます。林の中には主食となるドングリ、クリ、クルミ、などの木の実が豊富で、シカやイノシシ、ウサギなどの獲物も多かったようです。遺跡の南側を流れる名取川ではコイ、フナ、アユ、ウナギなどや、秋にはサケもたくさんとれたのでしょう。縄文人は、安全で快適なだけではなく、食べ物が手に入りやすいかどうかなど、様々なことを考えて住む場所を決めていたようです。

山田上ノ台遺跡 遠景

5 文化財の活用をはかるために――「縄文文化」学習資料 CD-ROM

「地中に縄文人の生活を求めて」

仙台市文化財課では、収蔵資料の活用の一環として、これまで市内で発掘された縄文時代の資料や、収蔵図書などをもとに、「縄文文化」について調べてみようとする子供たちのために、その参考となる学習資料の作成を試みました。資料は「すむ」・「きる」・「たべる」・「縄文土器」など、関心を持った事項が調べ易いように、８つの項目に分けられております。今回の展示は、この学習資料を紙面に印刷し、各項目を再構成したものです。

学習資料の形態としては、コンピュータの普及にあわせ、CD-ROM にプリントしました。文化財資料について活用推進をはかるための事業の一端についてご理解いただければ幸いです。

発　行　仙台市教育委員会文化財課
仙台市青葉区国分町三丁目7-1
TEL:022-214-8893

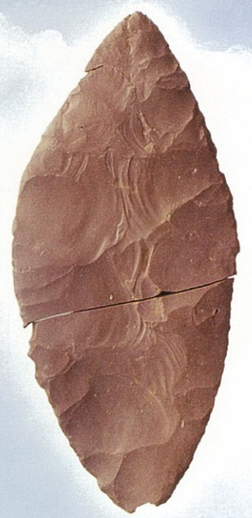
発行日　平成14年11月
印　刷　(株)共新精版印刷

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています

仙台市文化財パンフレット 第49集

第37回文化財展

縄文時代の仙台



仙台市教育委員会

1 縄文文化

寒冷な氷河期から温暖な後氷河期へと移行すると、日本列島の植物や動物は大きく変化しました。特に植物は、マツのような針葉樹の林から、ブナやクリのような広葉樹の林に変わりました。広葉樹の林はクリやドングリなどをはじめ、豊かな食料を提供してくれるようになりました。また、温暖な気候は、海や川の水産資源も豊かにしてくれました。

このような自然に対応して、山野・河川・海浜の恵みを狩猟・漁労・採集によって食料として獲得し、それを生活の基礎として暮らしていた時代が縄文時代です。この時代の、自然と調和した生活のしくみや信仰、縄文土器の作製をはじめとする暮らしを支える様々な技術をまとめて「縄文文化」と呼んでいます。

縄文時代は、約13,000～12,000年前から2,400年くらい前までの、およそ10,000年間も続きました。この間、生活の基盤は自然の恵みに依存していましたが、同じような生活状態が続いたわけではありません。土器やいろいろな道具の種類の変化・装飾品などの製作技術の変化・集落内の建物の変化・遺跡数の増減などから、文化の発展や人口の変化を知ることができます。これまでの研究では、土器や道具の種類は時とともに増加し、様々な道具や装飾品は製作技術が次第に精巧になり、建物の種類も増加していることが分かってきました。簡素な家族的な家から村へ、そして複数の村が関係する社会へと変化したと推定されます。

縄文文化の変遷表

年　代	時　代		主なできごと（変化）
	旧石器時代		・寒冷な気候、森林は貧弱は食料資源 ・狩猟を中心とした移動生活
約12000年前	縄文時代	草創期	・この頃氷河期が終わる ・土器や弓矢の使用が始まる ・竪穴住居からなる小規模な村ができる
約 9000年前		早期	・土器の模様として縄文が定着する ・貝塚が残されるようになる ・いくつかの地域で大規模な集落が出現
約 7000年前		前期	・温暖化が進み、海が内陸まで進出する ・この頃から犬の飼育や漆の使用が始まる ・住居が環状にめぐり、中央に広場や墓地を持つムラが出現
約 5000年前		中期	・各地に大規模なムラが出現し、縄文時代の人口のピークをむかえる ・東京湾、松島湾などに大規模な貝塚が形成 ・土偶の製作が盛んになる
約 4000年前		後期	・土偶、土版、石刀などの祭祀具が発達 ・環状列石をはじめとする様々な配石遺構をもつムラ、墓地や祭祀場が出現する ・ムラの規模が小さくなる
約 3000年前		晩期	・東北地方に精巧な土器を作る亀ヶ岡文化が繁栄する ・この頃西日本を中心に稲作農耕の証拠が見られる ・中部日本で遺跡数の減少が顕著になる
約 2400年前	弥生時代		・九州北部に水田稲作栽培の技術が伝わる ・農耕を生活の基盤とした社会の成立

2 縄文土器

縄文土器は粘土で形を作り、それを焼いて固めた、化学変化の利用の始まりです。現代の陶磁器の原形です。

縄文土器が使われるようになると、それまで食べられなかったものや、保存できなかったものが、アクを抜いたり、柔らかくしたりして食べたられるようになりました。さらに大量に煮て干物を作り、食料を保存することができるようになりました。煮るという新しい調理法は食べ物の種類を増やし、食中毒などの事故を減らすことにも役立ちました。

1. 深鉢…煮炊き用の土器

ドングリなどを食べられるようにするためにはアク抜きが必要ですし、消化のよいデンプン質に調理するためには煮沸が必要でした。日常生活の中で使用する回数も多く、破損による作りかえが何回も行われ、多量の深鉢が遺跡に残されることになります。その他の用途としては、埋葬用の棺や炉の部品に使用される例が確認されています。

大野田遺跡の土器

2. 鉢…盛りつけ用、お供え用の土器

深鉢と区別が困難な場合もあるため、一部煮炊き用に使用されている可能性もあります。台付鉢も同様に考えられます。

3. 浅鉢・皿…盛りつけ用、お供え用の土器

ドングリやトチの実などの粉をこねる道具としての用途も考えられます。縄文時代の中期から増加し、後晩期に盛んに用いられました。仙台市の下ノ内浦遺跡の場合、大小の大きさのものがみられます。もしかすると個人個人の取り皿のように使われていたのかもしれません。

4. 壺…貯蔵用の土器（細口壺・広口壺）

細口壺は、中身の出し入れを考えると液体を入れていたと考えられます。キイチゴなどを発酵させて酒を作り、貯蔵したのかもしれません。広口壺は、貝輪、石鏃、珠玉などが入った出土例があるので、貴重品入れにも使用されていたようです。

5. 注口土器…貯蔵と液体の分配用の土器

注ぎ口があることから、液体を入れる容器と考えられます。内容物は壺と同じでしょう。仙台市内では縄文時代後期はじめの大野田遺跡などから出土しています。

3 石器と道具

縄文人の日常生活のほとんどにかかわる道具が「石器」です。獲物を捕る道具、材料を採る道具、その道具を作る道具として、石器は縄文人にとって欠かせないものでした。

❶ 狩りの石器

1. 石　鏃

弓の矢の先端につける石製の鏃です。竹などの柄にアスファルトなどで固定して使用されました。

石鏃は鹿角製の銛の先端につけて漁労用にも用いられていました。仙台市内では蒲沢山遺跡（青葉区）や北前遺跡（太白区）など、縄文時代の遺跡から数多く出土する石器のひとつです。

石鏃：下ノ内浦遺跡

2. 石　槍

槍の先につけられる石器です。縄文時代以前から使われれていましたが、縄文時代中期から出土数は少なくなります。石槍はイルカや熊などを獲るために使われていたと考えられます。槍先としての使い方のほかに、短い柄をつけた短剣や片側に柄をつけたナイフとしての使い方も考えられています。

石槍：大野田遺跡

❷ 物作りの石器

1. 磨製石斧

石をおおまかに打ち欠いて整形し、仕上げに砥石で磨いて作る石の斧です。柄に取り付けて木の伐採や加工に使われました。柄のつけ方には縦斧と横斧と呼ばれる二種類があります。全面が研磨される石斧は縄文時代になって作られました。

石斧：大野田遺跡

2. 石　匙

石匙は携帯用の万能ナイフのようなもので、刀をつけた剥片にヒモを結ぶための小さなつまみ状の突起を作り出した石器です。東北地方では縄文時代前半には縦形が主流でしたが、徐々に横形へと変化して行きます。これに対して、関西より西の地域では横型が一般的になっています。

3. 石　篦

片面あるいは表裏両面をいくらか粗い加工をほどこしたもので、短辺が刃の部分になります。柄に挟み込んで固定し、木や骨を削ったり皮をなめしたりするのに使われたと考えられています。また、大型の石篦は土を掘るために使われたのではないかと想像されています。

石匙・石錐：大野田遺跡

4. 石　錐

皮や骨角器、土器・石製品に穴をあけるための石の錐です。細長い棒状のものやそれにつまみの部分が作り出されたもの、剥片の一部を尖らせたものなどがあります。

柄につけて使った場合と、そのまま手で持って使った場合とがあります。

先端部には、使用していたことを示すように「摩耗痕」と呼ばれるすりへった跡が残っています。

5. 砥　石

石器や骨角器、木器の形を作ったり、磨いたりするのに欠かせないのが砥石です。大型で置いて使うものと、手で持って使う小型のものがあります。

砥石の材料には安山岩、砂岩、凝灰岩などが使われ、研ぐものにより使い分けていました。